和名倉百年の森

wanagura hyakunen no mori

NPO法人百年の森づくりの会

2015 4.1 29号

巻頭言……1／エコサロン公開講座　本多静六　その人と業績……2－3／
あれから1年植林地の現況……4－6／和名倉山森づくり報告……7／年間スケジュール……裏表紙

森林・林業再生プランの推進が急務

理事長　坂本和穂

森林にはさまざまな機能があり、我々はそこから多くの恩恵を受けている。

周知のとおり全国の市町村では、全ての森林を「水土保全林」、「森林と人との共生林」、「資源の循環利用林」の三つのタイプに区分している。

水土保全林は、良質で安全な水を安定的に供給する水源涵養の働きと山崩れや土砂流出などの災害を防止する働きを有する森林。

森林と人との共生林は、貴重な自然環境と野生生物の棲息の場、レクリエーションなど森林とのふれあいの場、人々の生活環境を守る働きをする森林。

資源の循環利用林は、安定して木材を供給する資源としての役割をもつ森林。

これら森林の整備については、天然林では自然の力で育て、人工林では長い年月にわたり手入れが必要で（植栽―下刈り―除伐―間伐―主伐）を循環的に行うことによって森林の持続的な更新が図られるのである。

森林は、古来より国造りの基であり、絶えることなく水を育み、災害を防いで地域の安全を確保し、木材という再生可能な資源を生み出してきた。

また近年では二酸化炭素の吸収等によって地球温暖化防止に寄与するなどの多様な役割を果たし、人々の暮らしに貢献している。

わが百年の森づくりの会は、これまで森林整備の重要な一翼を担い、植栽から徐栽までの活動を続けてきた。

その先の間伐と主伐は、林業技術者の領域で、これらの一連の作業が順次円滑に行なわれなければ、循環はストップしてしまう。

従って我々は、守備範囲以外のことについても常に関心をもち、そのサイクルが回っていくよう配慮していかなければならない。

日本は国土面積（三七七九万ヘクタール）に占める森林の割合が六十六％と、農地の十二％、宅地の五％に比べて圧倒的に高い。

また森林のうち、天然林は五十九％で人工林は四十一％となっている。

そして歴史を紐解くと、戦後復興のため、木材の需要が急増し「拡大造林」なる政策で里山の雑木林や奥山の天然林が伐採され、その跡地へスギやヒノキなど比較的成長が早く、経済的に価値の高い針葉樹が植えられた。

しかしながら近年、これらの樹木は伐採の時期に達しているにもかかわらず、伐採されずに放置され、荒廃した森林が目立つようになってきた。

どうしてこのような事態を招くことになったのか、そこには林業の厳しい現実が見えてくる。

昭和五十五年頃をピークに国産材の価格が落ち続け、日本の林業経営は苦しくなり、木材の自給率も昭和三十年には九割以上であったものが、価格の安い輸入木材に押され、現在では三割以下にまで落ち込んでいる。

林業を営む者にとっては、間伐などの森林整備を行い、主伐（収穫のための伐採）を行って木材を搬出しても、採算がとれず赤字になってしまう。

若者は都市部に出て行き、林業以外に目立った産業のない山村地域では、働き手の高齢化、後継者不足で林業の衰退とともに地域の活力も低下し、まさに「限界集落」と呼ばれる痛ましい問題まで起こっている。

森林の恵みを将来にわたり持続的に受けるためには、日本の森林を健全に保つ必要がある。

林業に携わる人々が、安心して山村に定住し、林業を継続できるようにする条件を整えることが必須である。

具体的には、質量とも外材に負けない国産材の需要拡大、木材加工・流通体制の確立、木材利用の多角化に向けた研究開発、公共施設等での木材利用の促進などが挙げられる。

農林水産省では、五年前から〝木材自給率五十％（二〇二〇年までに）〟をめざして「森林・林業再生プラン」を推進している。

このプランを成功に導くためには、国・地方公共団体はもちろん、森林組合・NPO・企業等の幅広い連携協力が不可欠である。

わが百年の森づくりの会も、新たなプランのもとに、会員の若返りと参加意識をさらに高め、これまでの植栽を中心とした活動のみならず、森林プランナーの育成や山村の活性化支援、森林資源を活用したニュービジネスの提案などに男女共同で積極的に取り組んでいきたい。

エコサロン公開講座（平成二十六年十一月八日）

本多静六　その人と業績

講師　お茶の水女子大学名誉教授　遠山　益　氏

一、プロローグ

本多は人生計画表を設定して、大体これに沿って生きてきた。教練期（6～20歳）、勤労期（21～65歳）、奉仕期（86～120歳）である。その業績や社会貢献をみると、林学、造園学および人生相談の3つに大別できる。本業は東大教授で、多くの子弟を教育し、自らは本多造林学を体系化し、我が国の造園学の基礎を確立するとともに、幅広い膨大な社会貢献をした人である。

二、林学に入る動機は単純で、島村泰氏にすすめられて、東京山林学校（東大農学部の前身）に入学する。正規の教育を受けていないので、初め苦労したが、天性の努力家であり首席で卒業し、ドイツのターラント山林学校からミュンヘン大学に進み博士号を取得して帰国、東大助教授に就任した。以来退官するまで35年間、教育・研究にあたり、本多のもとからは多くの俊英が巣立った。

本多は実学を重んじて、研究室に閉じ籠る人ではなかった。林学で社会貢献を考え、まず初めに実行したのが鉄道防雪林の創設であった。明治26年26歳の青年であった。翌年には我が国初の大学演習林の設置、33年には東京府の水道水源林の復旧植林、大正4年には明治神宮の森づくりなど、ドイツで見聞したこと、学んだことなどを実行して具体化した。

このような本多の森づくりや造林にあたるときの基本的な考え（哲学）は何であったかと考察すると、カールガイヤー（Karl J Gayer　1822～1907）の「自然に帰れ」“Rückkher zur Natur“につきあたる。ガイヤーは1871～91までミュンヘン大学造林学教授で、世界的に大きな影響を与えたドイツの林学者であった。たとえば、大面積に画一的な針葉樹の人工植栽を批判し、小面積の混交林造成を推奨した。また、天然更新法で多くの業績を残した。

三、本多は林学、特に造林学から出発したが、ある機会で思いも寄らず公園づくりに関係することになった。それは明治32年ころ、我が国建築学の権威者辰野金吾博士に出会ったことである。当時博士は東京市から日比谷公園の設計を依頼されて、日夜苦慮していたという。本多との会話の中で、いい鴨が見つかったと判断した博士は、自分の身代わりに本多を松田市長に推薦してしまった。

公園設計など一度も経験のない本多は大きな不安をもって、眠れない夜が続いたという。し

かし、30代の若い教授は、これは自分の名を社会に知ってもらう絶好の機会ととらえ、不安に勝ったのである。本多の設計案は市議会に承認され、人夫たちの陣頭指揮にあたり、この難題を見事に完成させたのであった。日比谷公園は我が国初の洋風都市公園として、明治36年6月1に開園した。

本多は全国各地に少なくとも50か所以上の公園の設計施工に当たったが、その際の哲学は何か。本多に先んじて西欧の文化に接してきた森鷗外、片山潜、安部磯雄らは異口同音に「公園は市民の肺臓なり。以てその如何に必要なるかを知るべし」と述べた。本多自身も大正5年有馬町役場での講演で「公園のない市中に住む人は、窓のない家に住むのと同様だ」と話している。これらの考えは都市公園発生のイギリスにおける公園造成の基本理念「・・すべての市民に生活を楽しむ機会と場所とを平等に与えなければならない。・・」とする人道主義に由来する。

後年、本多は自身の人生哲学に基づいて公園造成の基本的考えを発表した。それは「独立自強」という四文字熟語で表される。手短に解説すると「・・各人は自分で働いて生きてゆく、即ち独立自強が世界文化の大勢である。そのためには健康第一が必然となる。これを実現するには、十分な日光浴、新鮮な空気を呼吸、新鮮な食物を食すことに帰着する。これには戸外で活動生活するのが最適である。すべての人が利用できる共同野外室として、公園を設けるのである。

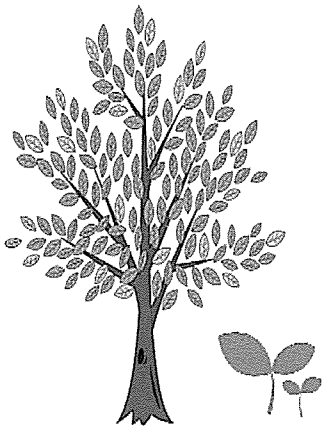
四、エピローグ

本多の故郷埼玉県では、緑とともに、自然との共生を考えて生きた本多の精神を若い子供たちが学び、そして継承してくれることを願って、一つの事業が進行中である。それは本多の人と成りと業績を「本多静六物語」という解り易い本にして、県下全小学校に各50部ずつ配布する予定である。教材として使用する。この背景は平成25年11月に埼玉県で開催された第37回全国育樹祭がある。この大会テーマ“育てようみどりは未来のたからもの”は本多の緑とともに生きた精神につながる。

現在、我が国は世界屈指の森林国である。これを成就したのは、長い歴史の間に自然と共存する柔和な文化を培ってきた日本人の国民性にあると考える。たとえば、江戸時代初期秋田藩の家老渋江正光は藩主佐竹義宣にたいして、「国の宝は山なり、然れども伐り尽くす時は用に立たず。尽きざる以前に備え立つべし。山の衰えは即ち国の衰えなり」と説いた。「森林は国の元なり」と言った熊沢蕃山と同じ精神であった。このため秋田藩は天下に誇るスギの美林を持つことになったのである。藩政時代から今日に至るまで、治山治水はわが国政のかなめである。

以上

本文は遠山氏が作成して聴講者に配布された資料を転載したものです。

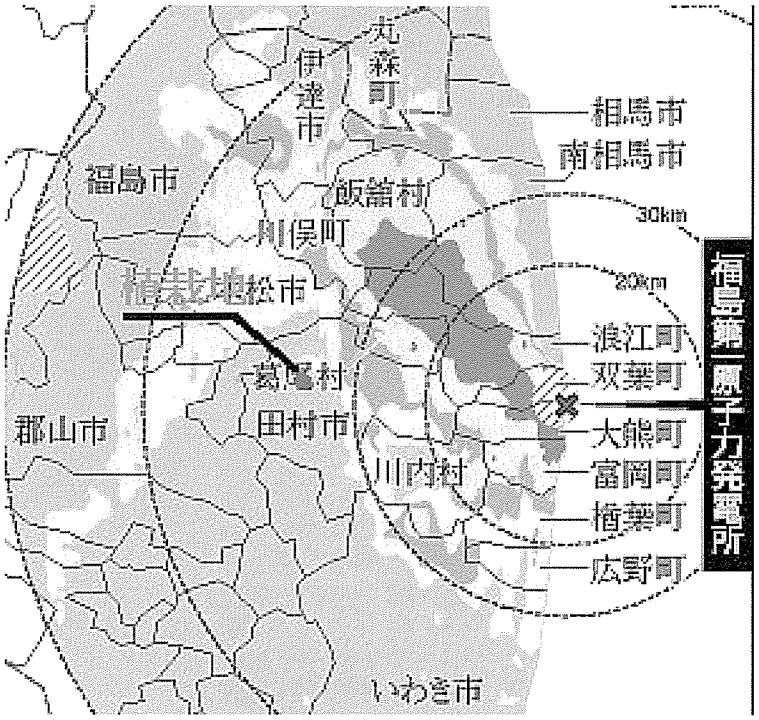


あれから1年植林地の現況

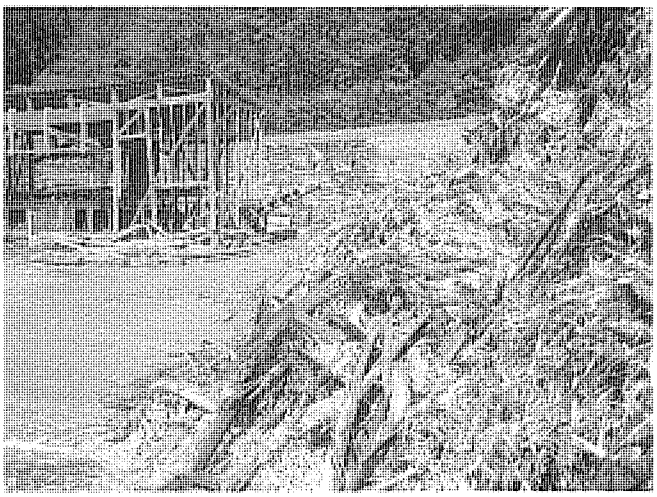
常務理事　守谷　裕之

昨年の4月6日に植林してから1年を向かえようとしています。今更ではありますが汚染分布図に植栽地の地点を落として見ました。

吉田さんから話を聞きましたが丁度放射能雲が掠めて通った場所であると、この図からも分かります。逆に福島第一原発より遠い郡山市の方が高いとも言われています。



山に入る前の田村森林組合事務所前の常設の線量計は0.10μSv／h　植栽した山の中に入ると0.252μSv／hを示している。やはり山の中は放射性物質が木の葉や樹皮などの付着しそれが落ちて堆積していると思われます。



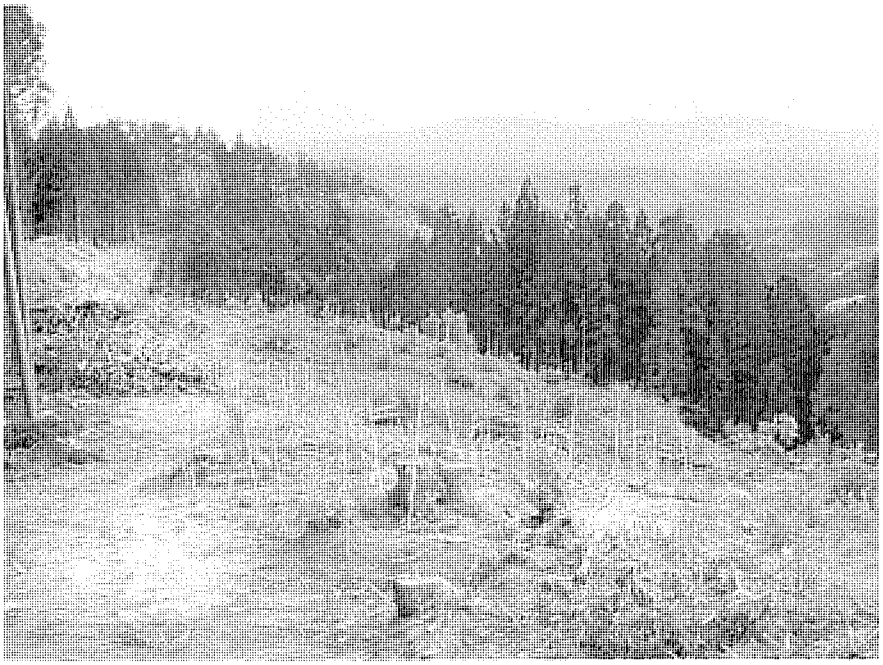
樹皮には放射性物質が付着し、当時は燃やすこともできず黒い袋に入れて山のように積まれていた。溜まる一方で処分方法も決まらずこれからどうなるか頭を抱えていました。樹皮を取れば問題なく建材として使用でき当時から出荷していた。

〈突然の雪が降り始め作業を中止〉

17年ものの大きな苗のブナは粗植え終わった時点で突然雪が降り始めた。急で広く大きな斜面の区域は半分しか植える事が出来ず仮植して後日植える事にしようとなった。

その後、田村森林組合の職員が苗を植えてくれました。苗1本ずつに竹の棒を立て、ピンクのリボンを結んでくれました。田村森林組合という森を創ることを生業としている人達と一緒に出来ことは幸運の何者でもないと思いました。

ボランティアという素人集団が少しでも森に関わる事が出来た。それだけで何か大きな満足が得られる。大変なのはこれからである。



4月上旬に残りを2日間で植えたそうです

植えるのは簡単である。苗木が大きくなる5年から7年は下草刈りをしないと周りの草や雑木に負けてしまう。

百年の森づくりの会で少しでも出来る事はないか検討したいものである。

〈元田村森林組合の森林整備課長の吉田徳義さんから写真が送られて来ました。〉

ブナの現状

（平成27年2月20日現在）

撮影日・平成27年2月20日(金)

撮影者・吉田　徳義

秩父の森のブナ（大小）は、福島の地でも雪・寒さに耐えながら頑張ってます。

急斜面に植えられた小さなブナの苗木硬い芽がしっかりと付いている。

緩斜面の17年もののブナ

2014年度下半期

和名倉山森づくり報告

和名倉山森づくり事業担当　高　岡　正　彦

2014年度上半期

5月25・25日　第34回植林ワーク

2月の豪雪後、仁田小屋整備。

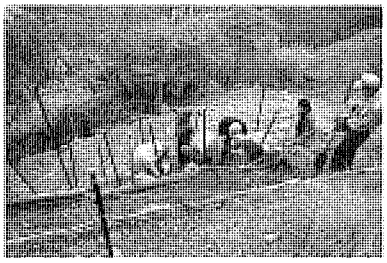
仁田小屋～和名倉山～東仙波山～大洞林道

10月25・26日　第35回植林ワーク

（仁田小屋整備・植林地鹿よけネット修理）

前回のワークにて仁田小屋下の崩落を確認、その時応急処置はしておいたものの崩落が進む可能性が高いので、今回は単管パイプを荷揚げし、よりしっかりした処置をすることにしました。

単管パイプは4mのもの（10本）を3等分しましたので1・3mのものが30本の荷になりました。今回もいずみ高校の山岳部が6名参加し、荷揚げを手伝ってくれたので大変助かりました。他の荷物もあるので20kg弱の荷物になったのですが、重さより左右に飛び出したパイプを立木にぶつからないように歩くのが重労働でした。そして小屋下へのパイプに打ち込みは足場が不安定で思い通りに打ち込めず、とても苦労しました。今後もこのパイプを持ち上げ、さらに補強する計画です。



26日は、仁田小屋の頭（1555m）付近の植林地の鹿よけネットの修理を行いました。枯れた木が倒れネットにもたれることで、壊れてしまいことが大半です。ネット内外の木の樹皮を見ると、やはりネットの効果は大きいと思われますので、今後もネット巻、ネット張を中心に活動しようと考えています。

ところで最近、和名倉山から東に延びるナシ尾根の藪が殆ど枯れて、とても歩きやすい状態になっています。調査し、植林するかまたは樹木の保護等の活動が考えられると思っています。

和名倉山では、戦後、木材の活用のために大量の樹木が切り出されました。ほぼ皆伐状態まで切り出した頃の64年（昭和39年）に、作業人の火の不始末から山火事が起こり、和名倉山山頂付近の400haが焼けたそうです。さらに、69年（昭和44年）にも東仙波山付近の300haを焼く山火事があったそうです。その後、輸入材に押され林業が衰退し、和名倉山で仕事が無くなり、同時に、人間の往来が無くなり藪化していったようです。

その和名倉山を以前のような森に作り直すというコンセプトで97年に埼玉大学WV部OB会の活動が始まりました。まずは仁田小屋尾根（旧大滝村村有林）での活動の承認を受け、00年には埼玉大学から独立し「百年の森づくりの会」を発足させ。01年（21世紀最初の年）に初の植林を行ないました。以後、植林地整備、植林、仁田小屋の再建、鹿よけネット張りなどを続けてきています。最近は山頂付近のシラビソにネットを巻くことを中心に活動しています。

2015年 活動スケジュール

活動への参加をご希望の方は、事前に事務局まで御連絡ください。

	総会・理事会	フィールド活動		苗づくり	エコサロン他
		和名倉	宝登山/大陽寺		
4月	■会報29号発行 ○4/20(月)常務理事会		■宝登山　補植作業 日時：4月26日(日) 集合：9：00/宝登山 ロープウエイ駅前広場		
5月	●5/18(月)理事会 場所：埼玉教育会館	◆第36回和名倉山ワーク 日時：5/30(土)～31(日) 集合：8：30/西武秩父駅			
6月	■第8回通常総会・記念講演会 日時：6/7(日)午後2時から 場所：埼玉教育会館 13：30　開場 14：00～14：50　第8回通常総会 15：00～16：30　記念講演会 16：45～18：30　懇親会 ○6/14(日)常務理事会		■宝登山下草刈り作業 日時：6/14(日) 集合：9：00/宝登山 ロープウエイ駅前広場		
7月					
8月	○8/23(日)常務理事会		■宝登山下草刈り作業 日時：8/23（日） 集合：9：00/宝登山 ロープウエイ駅前広場		
9月					
10月	■会報30号発行 ○10/19(月)常務理事会	◆第37回和名倉山ワーク 日時：10/24(土)～25(日) 集合：8：30/西武秩父駅			
11月	●11/16(月)理事会 場所：未定				◆公開講座 日時：11/7(土) 会場：未定
12月	○12/21(月)常務理事会				

和名倉百年の森　第29号 2015年4月１日発行
発行者：NPO法人百年の森づくりの会　坂本和穂

NPO法人百年の森づくりの会　事務局
〒330-0063 さいたま市浦和区高砂三丁目12-９農林会館地下１階　TEL/FAX：0480-22-3131
http：//www.100nen-forest.org　　e-mail：info@100nen-forest.org